

# 仏語動詞の現在語幹の形成と アナロジーについて

Formation des radicaux du présent  
et actions analogiques

矢島 猷 三  
Yuzo YAJIMA

Analogie (類推作用) は音声変化と共に言語変化の有力な原理であることは言うまでもない。19世紀以来多くの言語学者がこの原理に触れている。Hermann Paul は『言語史原理』の一章をこの問題のために割り、F. de Saussure もまた、『一般言語学講義』の第3編・第4章をこれに当てている。

類推の作用は、*oratore[m] : orator = honore[m] : X X=honor* に依ってラテン語の *rhotacisme* に端を発する *honos > honor* が説明されるように、その基本のメカニズムの部分は単純化して考えることができる。しかし、類推作用の出発点と到達点、即ちこの作用の及ぶ方向についてはたとえ同種の現象においても一様ではなく、容易に規則性を見出し難い。アナロジーの作用の仕方は、このように全体として極めて複雑な様相を呈していると言えよう。

複雑・多岐にわたる類推作用を整理して、その間に規則性、一般則を求めようとする試みには、古くから、多くの者が参与している。このうち比較的近いところでは、J. Kuryłowicz と W. Mańczak による論争を挙げることができよう。

Kuryłowicz は「類推作用は基になる形 (*formes de fondation*) から、それに基づいた形 (*formes fondées*) (多くの場合は派生形) へと及ぶ」の如く、類推のプロセスについて6つの法則 (*lois*) を立てるのであり、Mańczak の方は、「(動詞の活用形を除いて) 長い語は多くの場合短い語をモデルにして作り直される」の如く、9つの一般則を提示している。彼の示すものは“一般的傾向” (*tendances générales*) であり、“仮説” (*hypothèses*) である。両者の論争は、その後の多くの論考を生み出すきっかけとなるが、双方の説は共に類推作用についての普遍法則を求めるところから、抽象度が高く、本論で扱おうとするフランス語の動詞現在語幹の形成を考察するに当っては、直接これと結びつけて論を進めるのは困難と思われる。

本論では F. de La Chaussée の主著の一つ、『古仏語歴史形態法序説』 (*Initiation à la morphologie historique de l'ancien français*) の冒頭に示された *analogie* についての原理を検証しつつ、仏語史の中で動詞現在語幹が形成される際のアナロジーの種類と方向について、分類の試みを進めることとした。

de La Chaussée の説くところに依れば、*analogie* の生じる場合は2つであって、その第1は多数派 (*majoritaire*) が少数派 (*minoritaire*) を平均化する場合であり、その第2はベアリングの結果 (*effet de couple*) と名づけられる現象に依る場合である。

平均化 (*alignement*) はさらに *langue* におけるものと *discours* におけるものが区別される。*langue* における場合とは、たとえばラテン語で言えば *sum* のような不規則変化、*-us* に終わる女性名詞の如き例外形、3b 活用のように語数の少ないもの、以上のような体系内の少数派が多数派によって同化される場合であり、*discours* における場合とは談話での出現頻度の低い、たとえば特殊な専門用語などの少数派が出現頻度の高い多数派に依って影響を受けるものである。

“ベアリングの結果”とは多数・少数とは無関係に、2つの項目が連想作用によって対(ペア)を形成し、その結果、一方が他方に作用を及ぼすものである。対の形成には、機能の上での共通性(助動詞的に働く *sum* と *habeo* など)、意味領域の近接性(*jacere* と *cadere*)、語形の同一性(*mordre* と *tordre*)が関与する。

以上 de La Chaussée の示す枠組に基づいて仏語現在動詞語幹が形成される際のアナロジーの種々相を考察することとする。資料の多くは P. Fouché に依り、また音声変化の表記法は de La Chaussée のものに従った。

なお本論は第29回日本ロマンス語学会(1992年、5月)での口頭発表に基づくものである。

現在語幹の形成にあたって、アナロジーの出発点がどこにありどの方向に類推が及ぶのかを知るためには、現在語幹の種類とパラディグム内での配置を確かめる必要がある。現在語幹の種類とは語幹にアクセントを持つ強語幹(=強形)とアクセントを持たない弱語幹(=弱形)の2種類であり、両者の別はラテン語アクセントのいわゆる3音節の法則によって決定される。現在語幹をとるものうち、代表格として直説法現在、および周辺にあってこれと直接関わりと考えられる不定法と現在分詞に限って考えるならば、この2種の語幹の配置は、ラテン語段階では直説法現在においては、1・2・3人称単数、3人称複数(=6人称)は強形を取り、1人称複数(=4人称)、2人称複数(=5人称)では弱形となる。また現在分詞はすべて弱形であり(*amantem*)、不定法は第1(*amare*)、第2(*monere*)、第4(*audire*)活用は弱形であり、第3(*legere*)、3b(*capere*)動詞は強形となる。今便宜のためにラテン語での強形をF、弱形をfで示せば、各人称および不定法、現在分詞でのF、fの配分は1人称:F、2人称:F、3人称:F、6人称:F、不定法F(第3,3b活用)/f(第1,第2,第4活用)、4人称:f、5人称:f、現在分詞:fとなる。そして到達点のフランス語では語源段階でのFとfが各種のアナロジー作用によって新しい配置の関係をとることになり、その結果はf型(fのみとなるもの)、F型(Fのみとなるもの)、F・f共存型(F・fが共存しているもの)、Fイコールf型(F、fが共存するが同じ形態を示すもの)の4つに分類することができる。今これを図示するならば Fig 0の如くなる。この表の中でFおよびfによって示したものは、全く同一形の語幹を意味するものではない。更に詳細な叙述をおこなうとすれば、F<sub>1</sub>、F<sub>2</sub>、f<sub>1</sub>、f<sub>2</sub>のような区別が必要となろう(注1)。

では以上の4つの型が形成されるにあたってアナロジーはどこから発し、どのような方向を取って、どこへ到達したのであろうか。

Fig 1 (TROPARE) は弱形の人称形が基となって類推作用が他へ及ぶ典型的な場合である。不定法、4・5人称、現在分詞に現われる弱語幹が、1・2・3・6人称の強語幹を同化する。Fouché は弱形から強形に及ぶこの作用を現在語幹相互のアナロジーとしては最も普通のものであるとし、その故は弱語幹を備えた動詞形が数の上で圧倒的に多いからだと述べている(注2)。これは直説法現在の *paradigme* のみについて言っているのではなく、いわば水面下において直説法現在の弱語幹のアナロジーを支えている現在語幹を備えた他のテンスの弱形のすべてを指しているのである。たとえば同じ *tropare* の未完了過去形は \**tropēbat* > *truv-*、\**tropēbamus* > *truv-*、未来形は *tropare-habet* > \**troparat* > *truv-*、*tropare-habemus* > \**troparemus* > *truv-* のようになってすべての人称が弱語幹を持つ。このタイプのアナロジーは従って前述 de La Chaussée の分類によれば *langue* における *majoritaire* のケースであると言えよう。この種の類推作用のタイプに属する動詞の多くは第1活用動詞であるが、第1活用動詞は数が多いので同時に *discours* における *majoritaire* のケースであると言うこともできる。

Fig 2 (PLORARE) の例は逆に強語幹によって統一される場合である。1・2・3・6人称の強形 *plor-* が4・5人称と現在分詞、および不定法の弱形 *plur-* を同化する。強形が弱形に働きかけるのは普通とは逆の傾向であり、そこには「何か特殊な原因が介在しているのである」と Fouché は説いている(注3)。Fig 2の例

で言えば、特殊な原因とは名詞 *Pleur* の存在である。Fouché は強形が弱形に置き換わる原因として、主として次の2つを挙げている(注4)。(1)強語幹の動詞形が頻繁に使用される場合: *j'aime* [ *amez* → *amez* ], *je vous prie* [ *preiez* → *priez* ], *je (re)nie* [ *neiez* → *niez* ], *porte* (命令形) [ *portez* → *portez* ] ; (2)同一語幹を備えた名詞の存在: *prix* [ *preisiez* → *prisez* ], *scie* [ *seiez* → *sciez* ], *appui* [ *apoteiez* → *appuyez* ], *demeure* [ *demorez* → *demeurez* ], *pleur* [ *plorz* → *pleurez* ]。これを de La Chaussée 的に表現し直すならば(1)は *discours* における *majoritaire* によるものであり、(2)は形および意味の上からの *effet de couple* に由来するものであり、同時に同一語幹の名詞が *discours* 内で高い頻度を有していることと無関係ではない。

現在語幹のすべてが強語幹化する場合、しかし上記のみではない。Fig 3 (PLICARE) に示すものは他の動詞語彙に関わるものである。plicare の活用に現れる類推は、前出の *prier* がまだ強形 *pri-* によって覆われる以前、即ち *pri-* / *prei-* の母音交替が有効であった時期に、双方の弱語幹形に共通の音形 *-éi-* を軸として作用したものであろう。*pleier* の強形 *pléi-* は *preier* の強形 *pri-* に同化し、その結果生じた *pli-* が次に弱形 *pléi-* を *pli-* に変える。音形 *-éi-* に基づく他の動詞形との *couple* が強形の姿を変え、さらにそれが弱形に及んでいる。そしてこの一連のアナロジーの背後には (*je vous*) *prie* に備った頻度の上での *majoritaire* の影を見ることができよう。

類似の場合が Fig 4 (CREMERE) の例である。他の動詞形によって強形が形を変え、それが次に弱形に及ぶという点は同じであるが、*couple* のきっかけを作るのが強形である点では異なる。*criembre* の強形 *krīēm-* (*krīēm-*) は語幹の二重鼻母音 *-īē-* が *plaindre* の強形の二重鼻母音の *-ēī-* と同じ二重鼻母音でありながらちょうど逆順の関係にあり、両者は連想上結びつきやすい。ここからまず強形が *krēīn-* (*krēīn-*) となり次いで弱形も *krēīn-* と変じて、いわば活用のタイプが別のもつ入れかわることになる。活用形の内部に *-ēī-* を持つ動詞としては不定法の語源 *-ANGERE*, *-INGERE* から生じる *atteindre*, (*en*)*freindre*, *ceindre*, *peindre*, *teindre* などがあり、内部に *-īē-* を持つ *-EMERE* 起源の *criembre*, *giembre* などよりも数が多い。活用のタイプという *langue* の頻度と密接に関わる類推現象であろう。なお Fig 3 の例では不定法は弱形に属し、Fig 4 の例では強形である。この事実は連想のきっかけに不定法が関与することを暗示するものかもしれない。

結果から見れば強形が弱形を同化することになるが、途中の段階で現在分詞の果す役割が明らかな場合がある。Fig 5 に示す *VIDERE* の場合である。文献に残された証拠から現在分詞の強形化が4・5人称の強形化より早く進んでいたことが明らかなので(注5)、アナロジーは1・2・3・6人称→現在分詞→4・5人称の順に進行したことになる。なおこの際 *avoir* の1人称単数形 *ai* が *ai* : *aiānt* = *véi* : *véiānt* の比例式によって弱形の現在分詞形 *vēānt* を強形の *véiānt* に変えたというのが通説である(注6)。*discours* において非常に高い頻度で現れる *ai* が、形を通しての連想によって元からの強形 *véi-* を後押しする形でアナロジーを進めたことになる。現在分詞を経由する同様の類推の経過は *ouir* でも見ることができる。( *ai* → *oant* → *oiant* → *oons* → *oions* )。 *croire* についても結果だけからは同様の経過を辿ったように見えるが、現在分詞形 *croyant* と4・5人称形 (*creons* → *croyons*, *creez* → *croyez*) の間のアナロジーの有無は明白ではない。Fouché は現在分詞の弱形 *creant* が強形化(→ *croyant*) したのは出現の時期(*moyen français*)から考えて *ai*, *aiant* ではなく、*voi*, *voiant* の類推によるものとしている(注7)。

アナロジーが作用する場合に不定法の果す役割は、Fouché が考えているほど頻繁に類推の直接の出発点にはなっていないとしても(注8)、不定法からの直接の影響を認めざるを得ないケースがある。Fig 6 (PONERE) の例で4・5・6人称および現在分詞が *-d-* を取るのは、疑いもなく不定法の *ponere* > *poune* > *pōndre* に生じた *épenthétique* の *d* がもともになっている。また Fig 7 (TORKERE) の例では同じく4・5・6人称および現在分詞が不定法のアナロジーを蒙っているが作用は2段階で、まず音声発展形の *tortre* が、次いで他の動詞の

不定法からの類推形 *tordre* が出発点となっている。なお *pondre*, *tordre* の 2 例とも類推の到達点は弱形、強形の双方にまたがっている。*tordre* がアナロジーを及ぼす原因は詳かではないが *pondre*, *tordre* については *repondre*, *mordre*, *perdre* など語形の上で共通性をもつ頻度の高い他の動詞の不定法との連想が生じるからであろう。

Fig 8 (POTERE)では不定法の音声発展形 *puoir* (< *poëir* < *potère*) にいわゆる *v transitoire* が出現し、4・5・6 人称および現在分詞にもこれが及ぶ。*Fouché* は *pioine* が *pivoine* を生じる場合と同じく *éi* が *wè* に達したあと *vwè* になるからだとして音声変化説を唱えるが(注9)、ここは形が類似しているほかに機能の上でも助動詞的役割を演じるという共通の性質を備えた高頻度の *avoir*, *devoir* からのアナロジーと見るのが妥当であろう。

Fig 9 の *DICERE*, Fig 10 の *FACERE* も、解釈の相違はあれいずれも不定法が人称形に類推作用を及ぼしているものである。強形の 2・3 人称単数 *dikis*, *dikit*, *fakis*, *fakit* は, *plakes*, *plaket* が *plaiš*, *plaišt* となるように *diš*, *dist*, *faiš*, *faist* となるのが古フランス語段階での音声発展形のはずである(注10)。これが実際は *dis*, *dit*, *fais*, *fait* となっているのは何らかのアナロジーの作用を仮定せざるをえない。*Fouché* は不定法 *dikere*, *fakere* は、調音エネルギーの弱い *pénultième atone* の音節に位置する *-k\** が、非常に早い時期から *sonorisation* を生じる結果 *digere*, *fagere* となり、この *-g-* がアナロジーによって 2・3 人称を *digis* (> *dijis* > *dis*), *digit* (> *dijit* > *dit*) に変えんとする(注11)。一方 *de La Chaussée* によれば不定法 *dikere*, *fakere* は *syncope* によって *dikre*, *fakre* となり, *dijre*, *fayre* に達する。この *-y-* がアナロジーによって *dikis*, *dikit*, *fakis*, *fakit* を *dijis* (> *dis*), *dijit* (> *dit*), *fajis* (> *fais*), *fajit* (> *fait*) に変えるのである。この際不定法が *dikre*, *fakre* であった段階からすでにアナロジーの影響を受けていた 5 人称形 *dijtes* (> *diktēs* ← *diketēs*), *fajtes* (< *faktēs* ← *fakētēs*) もこの作用に与っている(注12)。次に 4・5 人称形は *Fouché* によれば、不定法と同様に *pénultième atone* に位置するので *sonorisation* によって *digimus*, *fagimus*, *digitis*, *fagitis* を生み、次いでこれが *dimeš* (< *dijimus*), *faimēš* (< *fajimus*), *dijtes* (< *dijitis*), *fajtes* (< *fajitis*) となる。*de La Chaussée* は(5 人称は前述のとおりだが) 4 人称については不定法の影響か、5 人称のアナロジーによるものかは不明だとしている。

両者の説明のうち *Fouché* の前提をなす *-k\** の *sonorisation* は *syncope* の現象が考慮されていない点で、また母音間の *-k\** はまず *iš* を生じ、それがのちに *iž* と有声音化すると考えるべき点で疑問がある。いずれにしてもこの 2 つのアナロジーの例は、他の動詞不定法との連想でなく *dire*, *faire* 自体の持つ *discours* での頻度の高さによるものと思われる。また一般的に、不定法に内在する人称形への影響力をも示すものかもしれない。

他の語彙的要素との連想作用の結果、直説法現在のパラディグムの内部にアナロジー形を生じるケースは、すでに様々な関連で述べられた幾つもの例の他に、Fig 11 に示すものがある。これは起源的に同一語幹から生じた *espérance* が動詞 *sperare* の強形と弱形に別々の結果を生じるものであって、強形に対しては *-w-* を脱落せしめる作用を、弱形に対しては *-e-* を *-é-* に変える働らきを及ぼす。この動詞と *mot savant* の名詞 *espérance* との結びつきは、形と意味の上での絆によるものであろう。また 1 人称単数形にのみアナロジーの及んだ例として、*pōssum* → *pōssyo* (Fig 8), *débeo* → *déyyo* (Fig 12) を挙げることができよう。いずれも出発点は *ayyo* (← *habeo*) で、機能の上での共通性(助動詞的用法)から生じた *couple* である。またこの結びつきは、*habeo* が *discours* の中でいわば最も高い頻度で現れる語形であることと無縁ではない。

最後に現在分詞も、*voir* の例に見る中間段階的なものではなく、明白にアナロジーの出発点となる場合がある。Fig 9 に見る 6 人称 *dizēnt*, 4 人称 *dizōns* は音声変化によってもたらされた現在分詞形 *dizānt* (< *di-*

kentem)の、また Fig 10 に現われる4人称 faizǔns (> fezǔ) は同じく音声発展形の現在分詞 faizǔnt (< fak(i)entem)からの類推形である。

以上述べて来たことによって、俗ラテン語からの仏語史の流れの中で直説法現在のパラディグムに現われるアナロジー形の出発点は、弱形または強形の人称形、不定法、現在分詞、そして他の語彙形であることが判る。そしてここから発したアナロジーの方向の多岐にわたるさまは、別に示した図の中の例によって明らかであろう(注13)。

パラディグムの外の別の語彙形からのアナロジーは独立に作用することもあるが、強語幹の人称形、および不定法と結びついて複合的に作用する場合が頻繁に見られる。即ち強形、不定法からの類推には、他の語彙の絡む場合が非常に多い。

de la Chaussée が説く類推を生み出す原理 — langue の majoritaire, discours の majoritaire, 連想による対(ついで)の形成 — はアナロジー分析の手がかりとして有効なものと思なしてよいであろう。ただこの原理の三本柱は互いに他を排除するものではなく、むしろ相互に通じ合うもの(ayyoとのカップルの形成、同時に ayyo の discours での高い頻度)と考えられる。

( Fig 0 )

	ラテン語	フランス語			
		f 型	F 型	F/f 型	F=f 型
1 人称	F	f	F	F	F=f
2 人称	F	f	F	F	F=f
3 人称	F	f	F	F	F=f
6 人称	F	f	F	F	F=f
不定法	F/f	f	F	F/f	F/f=F/F
4 人称	f	f	F	f	f=F
5 人称	f	f	F	f	f=F
現在分詞	f	f	F	f	f=F

{ ←→ はアナロジーの及ぶ方向, → はその結果, }  
アンダーラインはアクセントの位置を示す。

( Fig 1 ) TROPARE

1	tropo	> troef	→	tr <u>uv</u> -
2	tropas	> troev-	→	tr <u>uv</u> -
3	tropat	> troev-	→	tr <u>uv</u> -
6	trepant	> troev-	→	tr <u>uv</u> -
inf.	tropare	> truv-		
4	tropamus	> truv-		
5	tropatis	> truv-		
p. pr.	tropantem	> truv-		

( Fig 2 ) PLORARE

1	ploro	> ploer-		
2	ploras	> ploer-		
3	plorat	> ploer-		
6	plorant	> ploer-		
inf.	plorare	> plur-	→	ploer-
4	ploramus	> plur-	→	ploer-
5	ploratis	> plur-	→	ploer-
p. pr.	plorantem	> plur-	→	ploer-

( Fig 3 ) PLICARE

1	pliko	> plēi-	( ←+ pri- )	→ pli-
2	plikas	> plēi-	( ←+ pri- )	→ pli-
3	plikat	> plēi-	( ←+ pri- )	→ pli-
6	plikant	> plēi-	( ←+ pri- )	→ pli-
inf.	plikare	> plēi-	( préi- )	→ pli-
4	plikamus	> plēi-	( préi- )	→ pli-
5	plikatis	> plēi-	( préi- )	→ pli-
p. pr.	plikantem	> plēi-	( préi- )	→ pli-

( Fig 4 ) CREMERE

1	cremo	> krĕn-	( ←+ plēin- )	→ krĕin-
2	cremis	> krĕn-	( ←+ plēin- )	→ krĕin-
3	cremit	> krĕn-	( ←+ plēin- )	→ krĕin-
6	cremunt	> krĕm-	( ←+ plēin- )	→ krĕin-
inf.	cremere	> krĕm-	( ←+ plēin- )	→ krĕin-
4	cremimus	> kre-		→ krĕin-
5	cremitis	> kre-		→ krĕin-
p. pr.	crementem	> kre-		→ krĕin-

( Fig 5 ) VIDERE

1	video	> véi-	
2	vides	> véi-	
3	videt	> véi-	
6	vident	> véi-	
inf.	videre	> veĕi-	
4	videmus	> ve-	→ véi-
5	videtis	> ve-	→ véi-
p. pr.	videntem	> veant	→ véiant

*( ai )*  
*( aiant )*

( Fig 6 ) PONERE

1	pōno	→ pōnio	> pōin-	→ pōn-
2	pōnis	> pōn-		
3	pōnit	> pōn-		
6	pōnunt	> pōn-	→ pōnd-	
inf.	pōnere	> pōndre	( répondre )	
4	pōnimus	> pōn-	→ pōnd-	
5	pōnitis	> pōn-	→ pōnd-	
p. pr.	pōnentem	> pōn-	→ pōnd-	

( Fig 7 ) TORKERE

1	torko	> tork	→ tors̄	
2	torkis	> tors̄-		
3	torkit	> tors̄-		
6	torkunt	> tork	→ tort-	→ tord-
inf.	torkere	> tortre	→ tordre	
4	torkimus	> tors̄-	→ tort-	→ tord-
5	torkitis	> tors̄-	→ tort-	→ tord-
p. pr.	torkentem	> tors̄-	→ tort-	→ tord-

*( perdre )*  
*( mordre )*

( Fig 8 ) POTERE

1	pōssum	→ pōssyo	> puis	
2	pōtes	> poe-	( avoir )	
3	pōtet	> poe-	( devoir )	
6	pōtent	> poe-	→ poev-	
inf.	pōsse	→ potère	→ puoir	→ puvoir
4	pōtemus	> pu-	→ puv-	
5	pōtetis	> pu-	→ puv-	
p. pr.	pōtentem	> pu-	→ puv-	

*ayyo*

( Fig 9 ) DICERE

1 diko > diyo > di  
 2 dikis } → diyis > dis  
 3 dikit } → diyit > dit  
 6 dikunt > dięnt → dizęnt  
 inf. dikere > dikre > diyre > dirę  
 4 dikimus } → diyęmes → dizęns  
 5 dikitis } → diyteş → ditęş  
 p. pr. dikentem > dizęnt

( Fig 10 ) FACERE

1 fakio > faş > fais  
 2 fakis } → fayis > fais  
 3 fakit } → fayit > fait  
 6 fak(i)unt > fōnt  
 inf. fakere > fakre > fayre > faireę  
 4 fakimus } → faymeş → faizęns  
 5 fakitis } → fayteş > faitęş  
 p. pr. fak(i)ęnte > faizęnt

( Fig 11 ) SPERARE

(esperance)  
 1 spéro > espwēr- → espēr-  
 2 spéras > espwēr- → espēr-  
 3 spérat > espwēr- → espēr-  
 6 spérant > espwēr- → espēr-  
 inf. spérare > espęř- → espēr-  
 4 spéramus > espęř- → espēr-  
 5 spératis > espęř- → espēr-  
 p. pr. spérantem > espęř- → espēr-

( Fig 12 ) DEBERE

1 débeo → déyyo > déi-  
 2 débes > déi-  
 3 débet > déi-  
 6 débent > déi-  
 inf. débere > deęv-  
 4 débemus > deęv-  
 5 débētis > deęv-  
 p. pr. débentem > deęv-

- 注1. これについては矢島「強形と弱形」を参照。たとえば CREMEREは1人称  $F_1 \rightarrow F_2$ , 2人称  $F_1 \rightarrow F_2$ , 3人称  $F_1 \rightarrow F_2$ , 4人称  $f_1 \rightarrow F_2$ , 5人称  $f_1 \rightarrow F_2$ , 6人称  $F_1 \rightarrow F_2$ , 不定法  $F_1 \rightarrow F_2$ , 現在分詞  $f_1 \rightarrow F_2$  と表すことができる。
- 注2. Fouché, verbe, p58 : Les formes accentuées sur la désinence étant les plus nombreuses, ce sont elles qui ont imposé la plupart du temps leur vocalisme au reste de la conjugaison.
- 注3. Fouché, Verbe, p 58.
- 注4. Fouché, Verbe, pp 61 ~ 64.
- 注5. Fouché, Verbe, p 154.
- 注6. Fouché, Verbe, p 90.
- 注7. Fouché, Verbe, p 90.
- 注8. Fouché には「(il)lave (← leve) は不定法 laver に基づいて生じた」の如き表現が到るところに見られるが、アナロジーは不定法のみでなく弱形(強形)のすべてから発しているとすべきところであろう。
- 注9. Fouché, Phon. hist. p 646.
- 注10. voyelle + k' > iŝ'.
- 注11. Fouché, Phon. hist., p 626.
- 注12. de La Chaussée, Morph. hist. p 152, p 166.
- 注13. Fouché は直説法現在の人称形相互間に作用するアナロジーの傾向を、「主な類推作用の法則」(les principales lois analogiques)と名づけて解説している(Verbe, pp84~88)。そして例えば1人称は2人称から, 6人称は4・5人称から類推作用を受けるとする。

#### 参考書目

- E. et J. BOURCIEZ, Phonétique française, étude historique, Paris Klincksieck, 1967.
- F. de LA CHAUSSÉE, Initiation à la phonétique historique de l'ancien français, Paris, Klincksieck, 1974.
- F. de LA CHAUSSÉE, Initiation à la morphologie historique de l'ancien français, Paris, Klincksieck, 1977.
- P. FOUCHÉ, Phonétique historique du français, Paris, Klincksieck, 1952, 3 vol.
- P. FOUCHÉ, Morphologie historique du français, le verbe, Paris, Klincksieck, 1967.
- J. KURMIOWICZ, "La nature des procès dits analogiques", Readings in Linguistics II, pp.158~174, University of Chicago Press, 1966.
- A LANLY, Morphologie historique des verbes français, Paris, Bordas, 1977.
- W. MANCZAK, "Tendances générales de changements analogiques", Lingua 7, pp289~325, 387~420, 1958.
- G. MOIGNET, Grammaire de l'ancien français, Paris, Klincksieck, 1973.
- Kr. NYROP, Grammaire historique de la langue française tome II, 3<sup>e</sup> partie, Morphologie, Copenhagen, Gyldendal, 1968.
- J. PICOCHÉ, Précis de morphologie historique du français, Nathan, 1979.
- M. K. POPE, From Latin to Modern French, Manchester University Press, 1973.
- 矢島 三: フランス語動詞語幹の強形, 弱形と類推作用について, 愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)第24号, PP299~313, 1992年。